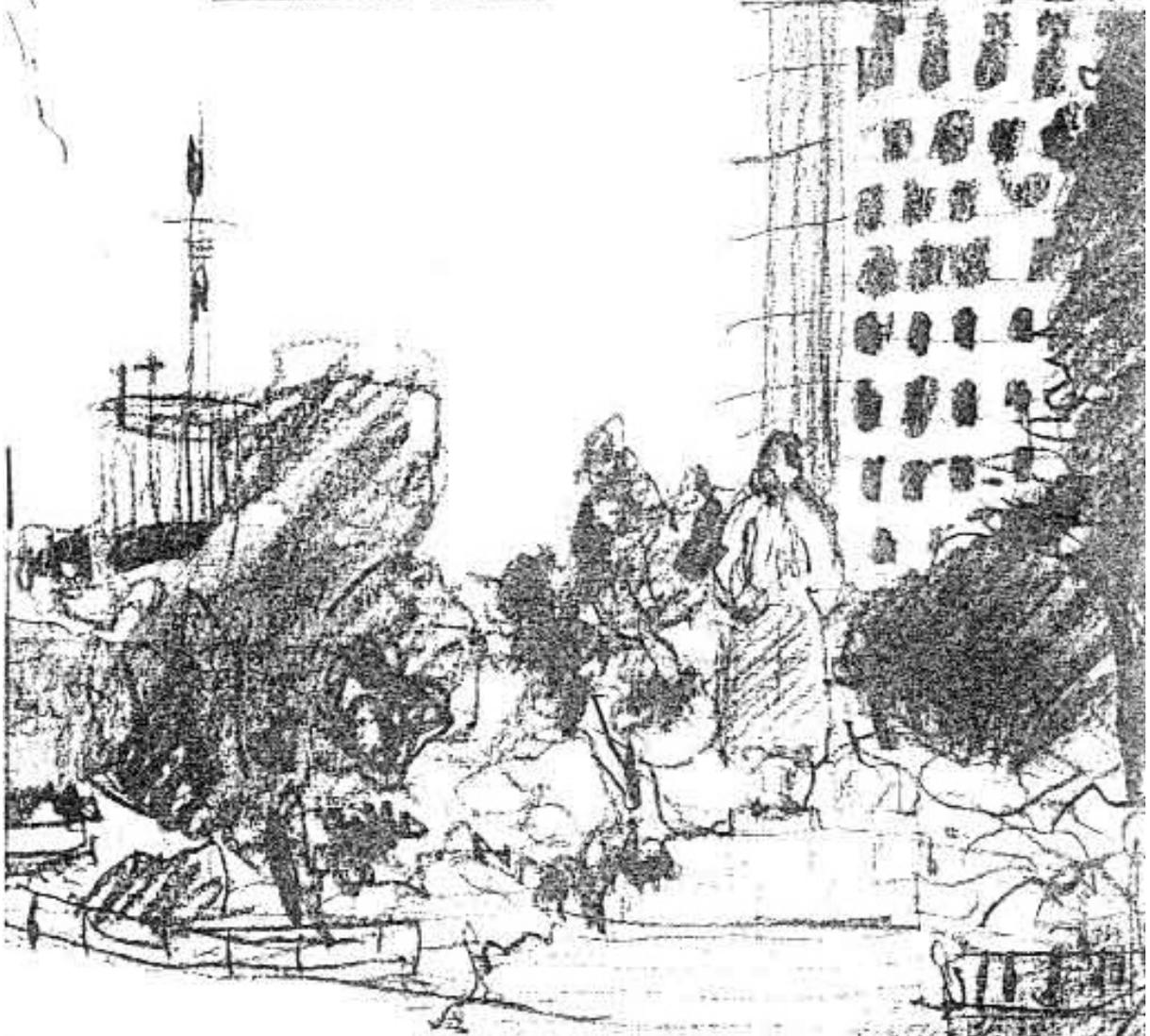


与歩道

NO. 1



昭和54年10月1日

千代田走友会

monabodaisshab

カーター米国大統領の手紙

THE WHITE HOUSE
WASHINGTON
July 20, 1979

ホワイト・ハウス
ワシントン

1979年7月20日

ロバート・コネリー様

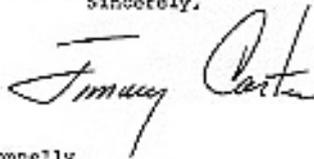
To Robert Connolly

Thank you for your letter and for transmitting the running shirts on behalf of the Chiyoda Ward Running Friends Association.

I hope you will convey my deep appreciation to Mr. Sakurai and the members of the club for this gesture of friendship. I appreciate also your courtesy in sharing with me the reprint of the running story.

With kind regards,

Sincerely,



Mr. Robert P. Connolly
President
International Technical
Development, Inc.
5-34, 8-chome
Akasaka
Minato-ku
Tokyo

あなたのお手紙と千代田走友会のランニングシャツを送ってくださってありがとうございます。

桜井氏やクラブメンバーの皆様の友情に対して、私が深く感謝していることをお伝えください。

さらにランニングストーリーの誌に私のことをのせていただいた好意に感謝しております。

敬具

ジミー・カーター

(ちよだ)創刊にあたって

桜井 守

人類が地球上に立ってから今日に至るまで、人間は歩き、走り、働くことが運命づけられているにもかかわらず、現在日常生活を営んでいる人々はどうだろうか。約半数の人々がなんらかの形で身体の不調を訴えているのが現状である。これらの人々は真にその原因がどこにあるかを追求したことがあるだろうか。

交通機関の八つ、電化及び自動化、労働におけるオートメ化など我々人間が作り出した文明に他ならないのである。その結果として肥満、胃、心臓、高血圧、糖尿病等いわゆる文明病になやまされ無気力、不健康人間を作り出しています。これら文明病にむしばまれている人々を救うため、日々努力し一人でも多く心身共に健康な人間を作ることが、スポーツを愛好する者に与えられた課題ではありませんか。

疲れを明日に残す運動をするのは愚か者のすること、スピードをきそい、命をかけてやるのが我々に与えられた運動ではありません。あぜらず、あきず、あきらめず、運動は生涯やってこそ意義があるのです。

これから会員一同「協力しあい」「助けあい」「励ましあい」会報（ちよだ）と共に細く永く続けることを紙上を借りて誓おうではありませんか。創刊にあたり努力して下さった会員各位に感謝し、この出版を意義あるものにしたいと考えます。

千代田走友会の始まり

和田 茂

旧千代田走友会は千代田区の駅伝大会に出るためだけに作られた名前で、もと多摩川クラブのメンバーの私の地元ということで、みんなを集めて参加していました。日本で初めて万国博覧会が大阪で開かれた年の翌年、つまり昭和46年4月頃、桜井さんが九段町会の人たちが走るの、千代田走友会に入って呉れというので、千代田走友会はあっても無いようなものでしたので、私は困ってしまいました。でも会を作るなら協力しようということで、毎週の日曜や休日に走ることになりました。

私は当時、4月に始めたものの、7 - 8月頃には誰も来なくなるだろうと思っていましたが、逆にだんだんとふえてきたのには驚きました。会則もその時決めましたが、余りごたごたと会則を最初から作るより、1年続いたら正式に会則、会長、会計を定め、会旗も作ろうと決め、ユニフォームは原則として作らないことにしました。そうしないと、それを着ないと入れないと思うので、ただランニングシャツだけを作るということでした。会則も政治、宗教は一切言わないという簡単なもので、みんなが自由に走るという会則が今日の千代田走友会を盛りあがらせたのだと思います。

会報（ちよだ）の発行を祝して

多摩川クラブ代表 阿部 登

千代田走友会が此度会報（ちよだ）を発刊されるに当たり、編集部池畑氏より、不肖小生にも挨拶とのこと、誠に光栄に存じます。松の緑に囲まれた健康マラソンのメッカ皇居周辺をホームコースとする千代田走友会と、ガス橋周辺の多摩川堤を健康マラソンの場とする多摩川クラブとは、幾多の走友同好会の中でも、もっとも親睦を深めているクラブです。多摩川クラブ主催の元日マラソンには会長桜井氏を陣頭に大先輩の柏木良之助氏、和田茂氏、中原誠策氏等、その他多数の千代田走友会の皆様例年ご支援を頂き、常日頃感謝申し上げます。20年に余る千代田走友会と多摩川クラブとの友好関係、その過ぎし跡を回顧するとき、数多くの楽しいことや、苦労したことが、走馬灯のように浮かんできます。千代田走友会が健康マラソンの同好会として、都内は無難、全国でもトップ的存在として活躍しておられることは、会長を初めとして、会員一同の並々ならぬご努力、ご精進の賜と深く感謝を敬意を表します。

千代田走友会の益々のご活躍、ご発展あらんことを祈り、祝詞と致します。

昭和54年7月27日

（ちよだ）創刊に寄せて

ランナーズ編集長 下条 由紀子

（ちよだ）の創刊おめでとうございます。走友会の老舗であり、全国走友会の憧れの的である皇居一周をホームコースにしている千代田走友会に会報がなかったのはちょっと寂しい気もしていたところでした。ランニングのように細く長く続けてゆかれることを祈ります。

私事になりますが、私もかつては千代田走友会に所属していました。入会は6年ぐらい前になりましたでしょうか。真面目な会員の皆さんは素朴で暖かさ、やさしさに溢れて、とても雰囲気のよい、そして居心地のよい、いつ行っても楽しいクラブでした。

またランナーズ誌創刊から今日に至るまで、会の皆様から様々な形でアドバイスやご支援を受けています。心からお礼を申し上げます。今後とも、今の雰囲気を失わない、誰にも親しめる千代田走友会として、未長く発展されることをお祈りいたします。

一つのお願い

北川 実雄

肥満の為走り初めてから早10年、苦しいながらも楽しい日々でした。最初の頃は10名程でしたが、最近では100名近い人々が日曜、祭日毎に参加し、非常に結構な事だと思います。これからは走ることを通して皆様方と益々親善をはかり、楽しく長く続けて行きたいと思います。つきましては皆様に一つのお願いがあります。それは私たちや、私たちの家族が病気や怪我をのため、輸血を緊急に必要とするとき、会員同士の助け合いの精神から、血液を提供し合おうではありませんか。その為には会員各自の血液型を会に登録しておけば機を逃せず、急に応じられるでしょう。

会員の皆様、どうぞ私の願いにご賛同の上、血液型を登録してください。終わりに皆様方が今後益々走ることよっての御健康を祈り、終わらせて頂きます。

地名の由来と略史(1)

池畑 泉

1. 千代田区。昭和7年従来東京都と改められ、都市部の15区に周辺の新都市部に20区を新設して35区になっていたが、同22年区統合によって区数は23区に縮小された。そのとき麹町区と神田区が一つになって千代田区は生まれた。

他の区名、例えば港、中央、新宿など、普通名詞としてそれぞれ意味を持っているが、千代田という普通名詞はどんなに委しい国語辞典を探しても見あたらない。しかし、固有名詞として古く、今の国電神田駅附近に中世の頃千代田という村があったという伝説に基づき、明治2年から昭和10年まで、千代田を町名とした町があった。天正18年徳川氏が江戸に本拠を置き、石垣一つなかった城の大改増築を行い、大江戸城とするに及んで、別名を千代田城と称した。伝説の村の名に千代にかけて揺るぎない城という意味をからませたのではないだろうか。(天正18年は1590年)

2. 平川門、平川濠 徳川家康の江戸入府当時、江戸の中心地を北西から南東に流れ、当時は海であったといい、下流は急に川幅が広くなり、間もなく三つに分かれて海に注いでおり、川辺に平川という村もあった。分流した川の二つは平川濠、白鳥濠、天神濠、大手濠、桔梗濠、馬場先濠などに作り変えられた。

平川門は旧二の丸の北方大手濠に架けられた平川橋の内側にあつて、平川御門、内郭門(うちぐるわもん)、平川口、また城中の死人や罪人を外に出す門であったので不浄門、奥女中出入りの門でお局門とも呼んでいた。三代将軍家光の乳母春日の局が、門限におくれて帰城し、己の権威を以て即刻の開門をせまることなく、正規の手続きをふんで門があくまで、夜の寒風に身をさら

していたという美談を生んだ門である。

雑感

原田 好吉

この度融資の手で会報発行の運びに至り御同慶にたえない。市民マラソンが急速に盛んになり、地域毎に或いは職場毎に走友会が誕生したことは何よりも喜ばしい事である。朝早くから夜遅くまで、楽しく走っている姿は何処でも見かけるものである。実にほほえましい気になる。私は広島や福岡へ行く機会が多い。平和公園、大濠公園に行くと誰か走っている。仲間に入れてもらって、一緒に走る。すぐ親しい友になる。マラソンならではの出来ない人間関係である。

カーター米大統領は「国民すべてスポーツに親しめ」と言った。政治理念の立派さに頭が下がる。「私は毎朝ジョッグをやる」と言う。敬服すべき政治家である。我が国にも体力作りのプロジェクトがあり、スポーツ人口が急増した事はその為でもある。

どの走友会でも同じ事だが、立派な組織にして、その機能を向上させる事は無論大切だが、より以上に忘れてはならない事は、好ましいムードを作ることではないかと思う。みんなが楽しいランニングを楽しめる雰囲気のある場に整備されるべきである様な気がする。なぜならば会員には老若男女それぞれ体力の格差のある者の集団であるからであり、その広場であるが故に、それに適応させるべきである。柏木さん、小林さん始め高齢者も気楽に走れる配慮も必然的に課題となる。体力の限界にいとむ者への方策、次代を背負う少年、幼児、女性ランナー等々の集まりであるが故に、その感を特に深くする。今後に残された大きな課題であろう。整備された雰囲気からは第二の瀬古や宗兄弟が必ず生まれるような気がする。楽しさが一杯漂う雰囲気のある広場を痛感するものである。

皇居周辺を走れることは素晴らしい誇りである。場所柄千代田走友会は日本を代表する走友会である。所属する会員は誇りをもつと共に、その重さを感じなくてはならない筈である。私も所属して7年余、そんな気持ちでいつもやって来た。私事で申し訳ないが、学生時代は短距離を走った。全日本の100米で優勝したこともある。当時は明治に谷三三五さん、東大に中村絹次郎さん、などの有名なスプリンターが居り、各大学高専にも11秒台のスプリンターが1~2名は居たが、学生短距離界は黎明期で、その直後に文理大の吉岡隆徳さんが彗星の如く現れ、10秒台を出して驚かせた。日本の短距離界も夜明けとなったものである。吉岡さんを「暁の特急」と言ったのも故なき非ずで、思えば今昔の感に堪えない。南部忠平さんとも幾度か顔を合わせた事もある。走友の堂山さんは私たちより少し後でしょうが、立教時代箱根駅伝で名を馳せた？ せた強者である。若い時からのスポーツマンは走力の寿命が長いということも事実のようである。

マラソンには基礎訓練が要求される。私も一年近く学芸大学の波田野義郎助教授に基礎訓練を受けた。1キロも走れなかった私が年間3500キロも走れるようになったのも、基礎訓練と練習の賜である。そして走ることが生活の中に定着したようである。人生も幸福に変わった。千代田の皆さんにも御世話になった。心から感謝している。今後も走りつつ、板橋区の老人スポーツの会長の職責を果たしたいと考えている。再び皇居周辺を走れることは最高の幸福であり、誇りであることを強調したい。色とりどりのユニフォーム姿で美しく走れることは青松に映えるパラダイスであり、日曜祭日の皇居周辺はマラソンのフェスティバルであってよい。

会報発行には幾多の苦勞も多いことと思う。専門的なことは必要としない。会員のプロフィール、去った会員のその後の消息、動静、会の歴史などが紹介されたら意義も深く、親近感を覚えるであろう。それに配慮されて編集されるようにして欲しい。その衝に当たる人に多謝する。発刊に当たり何か書くようにとの事であったが、取り止めのない雑感になったことを深くお詫びして稿を終わる次第です。

思い出(一)

堂山 和一

千代田走友会に入会してより早くも7年、皆様方と毎日曜日に御一緒し、冬の青梅マラソン、水戸マラソン、宗吾マラソン、OB駅伝、山中湖のタートルマラソン、千葉のサンケイマラソン等、思い出は尽きません。若き時代の学生生活、軍隊生活5年、戦後の廃居に帰っての数年、食う為の仕事、仕事の十数年、すっかり走ることを忘れた私、一寸した機会に千代田走友会を知り、毎日曜日皆様の御陰で楽しみを味わっている次第です。

齡(ヨワイ)はすでに60を越し、唯々マイペース、桜井会長と常に走友会のスイーパーを自任して練習を致している次第です。皇居1周を30分ペース、気が向けば10キロ15キロと走り、帰宅後朝昼兼ねての食事、一風呂。1週間の疲れを洗い流し、また新しい1週間の活力を養い、仕事に励んで居りますが、この度会報編集者から昔の箱根駅伝の思い出を書けとの事、遠い昔を思い出し、拙文を掲載させていただきます。

私が陸上競技に足を踏み入れた動機は先ず第一に私の幼少の頃の環境にあったと思います。と言うのは、小学校は四谷第二小学校(現在は廃校)は当時の四谷区塩町にありました。ところが4年生の時、中央線の東中野駅近くに手頃の家があり、一家をあげて移り住む事となりましたので、私も当然中野の小学校に転校するものと思って居りました。しかし乍ら当時の早稲田の理工学部在学していた長兄が受持の山岸先生の所に相談に行き、先生から「もう何年もない。遠い所でもないから、電車通学させてはどうか」と言われ、若かった兄はその場で承知して帰りました。それで私の電車通学が始まった。家から東中野駅まで約12~3分、信濃町駅から塩町まで15分位、朝は毎日駆け足を3年間繰り返して小学校を卒業し、中学校に入学、これがまた立川の府立二中(今の立川高校)今とちがい当時の中央線は東中野、立川間の電車は1時間に2本、時間によっては1本しかなく、駅から学校までは歩いて15分余り、電車通学の生徒は授業の始まる8字ギリギリの電車が来るので歩いて行ったら遅刻する。200名近くの生徒がカバンを下げて、走る走るの毎朝がランニングの競争です。

こんな毎日の繰り返しと、また学校でもマラソンが盛んで、勉強嫌いな私はついつい陸上競技部に入る事になる。府立の中学校であるので、先生は当時陸上競技が全盛であった文理科大学(後の教育大、今の筑波大)出身の先生方が殆どで、校長を始め殆どがそうであった。体育の先生は竹村博之先生と言って、東京陸協の発起人、其の後女子体育専門学校の先生をやられた方で、その先生の指導を受けて、本格的に陸上競技を始めた。昭和10年頃と思う。竹村先生も今は相当な年になられたと思うが、走友会の方が走った町田マラソンの時に審判長をやって居られるのをプログラムで見て、今尚健在なのだなど昔なつかしく思う次第です。

さて、ここで鍛えられ、先生にも可愛がられ、先生が中央の大会になると、審判員として出ら

れる其の日は練習を休み、切符を貰い、よく神宮競技場（今の国立競技場）に見学に行ったものです。私は長距離を走っていたので、特に長距離に感銘を受けました。当時の陸上競技は割合に人気があり、さしもの神宮競技場も満員にはならないが、8分の入りであった事を思い出します。それもその筈、織田幹生の時代は終わっていたが、100メートルの吉岡隆徳、棒高跳びの西田修平、大江季雄、200メートルの中島亥太郎、800メートルの青地球磨男、1500メートルの中島清（今評判の瀬古選手のコーチ：当時）1万メートルの村社講平、竹中正一郎等々、実に日本陸上競技の全盛時代であった。

私の生涯の思い出として残っているのは昭和10年（ベルリンオリンピックの前年）日米対抗陸上競技大会であった。当時は陸上でも水上でもオリンピックの前年は外国、特にアメリカからの選手を招いていた。当日竹村先生から切符を頂き、800メートルのレースを見た。当時の世界記録保持者はアメリカのカニンガムで、当然彼が優勝するものと思いきや、最後の第4コース、胸に日の丸を着けた青年が飛び出し、グングンとカニンガムを引き離す、カニンガムがそれを追うが追いつけず、優勝したのは日本の青地球磨男選手で、タイムは1分54秒の日本新記録であった。当時の日本の選手はまだ2分を切るのがやっとで、現在のタートル協会の岡田さんが確か1分58秒か9秒で、日本記録をもって居られたと思う。

日本快勝のレースを目の前に見て、私たち若人の血は燃えに燃えた。青地選手は当時の立教の学生であった。同じ年東京陸協創立記念東京府中学校陸上球技大会に先生に引率されて出場した。当時はまだ府立の中学校が外部の大会に出場することはなかったが、竹村先生が陸協を役員でもあったので申し込まれたものと思う。大会など初めてで、学校では走っているが、本格的なレースなど知らず、ただ前の者について走った。結果は1500メートルと500メートルに3位入賞。1位は後年専修大学に入り、専修が箱根駅伝で後にも先にもただ1回だけの優勝した時のメンバーで高瀬敏夫という選手だったことをまだ覚えている。皆さんがよく山下マラソンに藤沢に行かれるが、あの山下記念マラソンの山下選手も高瀬選手と共に優勝の立役者であったと思う。（以下次号）

皇居馬羅邨歳時記

初茜 丸ビル街の薨（いらか）染め
囀り（さえずり）や 左回りの片耳に
濠ぬるむ 衛士は眼差あそばせて
櫛（たすき）つく ゴール間近かや氷旗
雲の峰 清麻呂象下の友あまた
こぼれ萩 紅と白とに桜田門
禁足の土手駆け上る 曼珠沙華
霧まとう ちぎれちぎれの走者かな
孤影もよし 濠の白鳥走者われ
朝駆けや 薄目の一羽 浮寝床

元旦マラソン 橋本徒歩

短歌三首

茜さす東調布の坂道を 髪なびかせて走る娘一人
えんじゅの花散りしく坂を駆け登れど 茜さす街に人影を見ず
冬ならば賑う蔵王の山なみの 青き愛でつ走る坂みち (いづみ)

素晴らしき思い出

西村 政男

戦前から続いている岩城山神社往復参拝マラソン大会に友だち4人で初参加し、42キロを完走した時の喜び、今もって忘れられない思い出である。前以て先輩より参考意見を聞き、当日は白足袋にワラジ2足をタスキで結びつけ、ランニングシャツの内側に小さなポケットを付けて百円紙幣を2枚入れ(落伍したときの馬車賃)朝の5時16分発の一番電車で出発点の猿賀神社に向かった。

昭和21年の第13回登山マラソンである。8時に到着、本部に優勝した新城の佐藤だとか、これが弘前の森下だとか、造道の和田3兄弟などと、県下に名の知れた韋駄天ばかり、記念写真をとる時は小さくなって顔も見えない所にいた。参加者は昨年を大きく上回り87名(去年は53名)青森県のマラソン史上最高の人数である。午前10時県陸協の村上理事長の号砲で一斉にスタート。

初めてのフルマラソンであり、「先は長いのだから決して無理はするな、最後まで頑張り」と先輩から注意されていた。4人の中で僕が一番遅い筈だから、気楽に3人ならんで走った。1番速い神正良君は先頭集団をマークして別行動を取っていたのだった。弘前市を通り過ぎた頃より、徐々に登り坂となり、途中の審判員の友人から、神君は13キロ地点を16位で通過したと聞かされる。奴はやはりやるなと感心した。3人は1回となって52位、53位、54位だ。途中お腹がすいたので、リンゴ畑に入って1人で3個位もぎ取り、走りながら食べた。後から来た連中にも呉れてやり、体中の乾いた汗の塩を払い落としたり、なめたりして走った。20キロ地点を過ぎると、1人、また2人折り返した選手をすれ違おうが、行けども行けども16位だった筈の神君とは行きあわない。不安のうちに66段の石段を登り切った神社の前にも居ない。

復路は12キロの下り坂で、不思議な足も軽くなり、友だち2人を引き離して走った。前を走る選手を面白いほど追い越すことが出来た。

弘前市の入口に親方の兄さんが待って居て「あと5キロだ、頑張り」と励まし、自転車で伴走して呉れた。勇気百倍し、遂に32位で完走した。平山君は46位、福井君は折り返して2キロで落伍し救護車で帰って来たが、神君は居なかった。審判団と相談し、電話で八方手をつくしているうちに、途中の審判員より7名の落伍車が馬車で帰路についたという連絡があった。

3時の閉会式に先立つ20分前に神君をのせた馬車が帰ってきた。神君は19キロの地点で疲労と空腹で走れなくなり、民家に入ってご飯をご馳走になった。(以下次号)

ミス千代田走友会のくり言

塩沢 洋子(20才)

疲れしました。ちょっと走りすぎです。

膝も足脛も腫れています。とても痛いのです。

ヨウコ「神様、この足を治してください。」

神様「1ヶ月、お休みしなさい、治りますよ。」

ヨウコ「アラ、ソオウ。」ブツブツ1人言。今日で4日も休んでいるのだ。あと26日も休めるか。

一年以上もベッドで寝ていると、この疲れの味を味わいたくて、ウズウズしてくるのです。でも最近はちょっと味わいすぎです。足の爪3本もはがしています。痛いのです。でも食物がとてもおいしいのです。

毎日毎日、夜寝る頃は六ちゃんのお腹みたいにふくらんでいるのです。せめて会長のお腹ぐらいいにとどめなければと毎日毎日同じことを反省するのです。今もお腹がふくれすぎて動けないのです。でも六ちゃんみたいに1日中ふくれっぱなしでいるわけじゃないからまあいいや。

最近、又足に筋肉がついてカッコいい足になってきました。脚線美。この足、保険をあえようかしら。2千万円くらいでいいかしら。おそろしいものです。1年も寝ていると、どこをさがしても筋肉なぞ見あたらないのです。走り初めて7ヶ月、又筋肉もりもり、この筋肉を見て1人ニヤニヤしている最近の私です。

六ちゃんみたいなお腹で、筋肉をみてニヤニヤしている私を御想像下され。

無 題

内木 重雄

私が千代田走友会に入会して6年目、もう古いほうではないか。こんなに長く続けられたのは私を含めて走り終わった後の、あの快感を味わえるからやめられないのでしょうか。ある人は仕事より楽だという。まさにそうかも知れない。笑いとおしゃべりのスタート。そして徐々に間隔が広まり竹橋の坂を登りきる頃にはもう「マイペースで走ればいいや」という気分で順位も記録も大体決まってくる。あとは本人次第で、体調がよければ、多少記録がよくなる程度である。こうした甘えがあるから、好い記録は出る筈がない。それでもこんなグループにいるのだから、縁は奇なもの味なものである。

私は年に4～5回対外試合に出るが、それなりに充実感をもって帰ってくる。ふだん出来ない長距離レースの楽しみでもあり、苦しみでもある。それに立ち向かう時は多少なりと練習し気分を紛らわしている。出場しなければいいのにと、レースが終わった後で思うのだが、申し込む時は調子良さそうなので、「出て見るか」という気になって申し込む。こんなことを繰り返しているのだから、止められないのでしょうかね。

何かの縁で、この走友会に、こんなに長く厄介になって居ります。私は宗教をどうの、このという事は嫌いですが、縁とは不思議なもので、大切にしたいと思って居ります。私と彼女との出会いは或る酒場への1回の誘いであった。それまでに彼女の存在は知っていたのものの、この1年ふたこと、みこと話したに過ぎないのだから。あの時、そのひと時がなかったならば、今の彼女は存在しなかったでしょう。その翌日でも同じと言えば同じかも知れないが、彼女として存在したかどうか判らない。それ以来トントン拍子に事は運び、今の彼女が生まれました。今もってその星との出会いを不思議に思っている私です。

私のマラソン歴も細く長く続いています。一時中断したものの、千代田走友会で走って6年、重ねていうが苦しい時もあらば楽しい時も多い。それがマラソンだと思う。途中で走るのを止めて歩き始めると、ゆっくりとマラソンを楽しんでいる人にも追い抜かれる。より速く走ることはランニングの専門家に任せておけばよい。多数の人も私と五十歩百歩であろう。千代田走友会との出会い、そこには走ることを楽しむ休日の1日がある。そして仲間も多く居る。このひと時を大切に過ごす意味でも、この走友会で走る続けたい私です。

女性チャームランニングスクールの紹介

渡瀬 みつ子

今年の2月より「ランナース」主催の女性だけのランニングスクールが始まりました。銘して「女性チャームランニングスクール」何やら気はずかしい多前ですが、どうして、どうして、なかなかチャームな女性の集まりです。小学生から62才まで、思い思いのジョグパンも華やかでランニングを励んで居ります。

毎月最終土曜日の午後2時、代々木公園織田フィールド前集合。女性であれば誰でも、「初心者、ベテランを問いません。会費は200円、これは終わってからの飲料代になります。毎回足を出している事はうけ合い。それがランナースさんの良い所です。その他ちょっとしたお土産が会員に手渡され、ジャンケンの勝ち抜きで素敵なプレゼントがあり、私もシューズが当たって大変重宝しています。何しろリーダーさんが下条さんなので、彼女らしい、きめこまかい心遣いが会を盛り上げて居ります。毎回30名位の人が体操とジョグをゆっくり始めます。隣の織田フィールドやサッカー場の若者の、はじけるような激しさを尻目に、極めてエレガントに、トコトコ歩道橋を渡り、公園へと進みます。私は初めてここを走ったとき、芝生の上を所が都心にあったのにびっくりしました。

初心者とベテランに分かれて練習します。私はランナースの中村君がリーダーさんになったベテラン組に入り真っ先に落伍しました。彼は武相マラソンの時、あのすごい山道を10マイルコースで。あっさり優勝した人ですもの、私がついて行こうなんて考えるのがおこがましい事でした。しかも彼はランナースの出店の売り子の合間に走り優勝したのだから、私から見れば・・・インベーターかな。

1700mちょっとある自転車道を1時間で何周出来るか試してみました。6周が多いようでした。でも折角土の上を走れるのだから、これは勿体ない。それにコンクリート舗装は私の疲労がそう感じるのかも知れませんが、足に相当ひどいようです。

主催者は著名の指導者を呼ぶ事を心掛けて呉れますが、私は下条さんの指導でのんびり練習する時間を充分楽しんで居ります。他の人達もそうではないかと、皆さんの明るい顔を見ながら考えています。体操とランニングをくり返す2時間はあっけなく終わります。その後飲物を一緒にミーティングと言いましょうか、おしゃべりと言いましょうか、女性の特技で、これまた楽しい。「思いがけずフルに走っちゃったわ」と言う人。「孫ができてから走り出したのよ」と真っ赤なジョグウェアの素敵な人。「子供の頃からの持病を克服したわ」と明るく笑う娘さん。皆それぞれにドラマティックな人生を持っているなあと感心するばかりです。走る仲間に出会った時にいつも感じる生き生きとした、前向きに人生を切り開いて行く人の力強さが幸せに輝いて見えて、とても

嬉しいのです。

タイムも距離も人に話せるものは何もないけれど私なりのドラマを日々作って行きたいと心に思うひとときです。千代田走友会の男性を除く皆さん一度いらして見ませんか。

納涼懇親会記

編集部

今年の2月11日の夜、上野忍ばず池畔の東天紅で懇親会が盛大に行われたが、盛夏の納涼懇親会が7月29日午前9時30分から清麻呂公園で開催された。会費は男1000円、女500円、子供0円也。初めの企画では昼食は各自持参との事だったが、渡瀬みつ子さんの強い要望で、昨年通りサンドウィッチが山ほど用意された。みんな一汗も二汗もかいた後だが幸いにも空は曇りがち、弱い日射しの下でビール、サイダー、ジュースの飲み放題、西瓜、おつまみ、サンドウィッチの食べ放題、あっちに5人、こっちに10人と集まって歓談と哄笑の渦。用意された飲物、食べ物はみんなの胃袋に納まり切れず「サンドウィッチはいりませんか」とばかり売り声？晴れやかに渡瀬さんはあっちこっちと配り廻る始末。だが残り物は余り残らなかった。終わり近く、柏木さんが特技の紙芝居を見せる。いや聞かせるかな。12時近くみんなホ口酔加減の足取りで解散（但しレディは別でしたよ）

参加者の数は？ 3人だけあっちこっち歩き廻っている人が居ましたので正確な人数は分かりませんでした。呵々！

編集後記

会報創刊号の編集を終えて、会員諸賢の絶大なる御援助と後激励を衷心（ちゅうしん）から感謝します。プリントは新田製袋さんの御好意に甘えて、全てをお願い致しました。新田さんに対して衷心から深謝致します。寄稿して下さった原稿は若干書き換えた点がありますが、文意を損なうことはないよう、配慮した積もりですから何卒御諒承下さい。とに角せい一杯やって見ました。自分でも満足出来るものではありません。不備な点についての御叱責、御指導を願います。

編集責任者 池畑 泉

編集部より

此の度、始めて会報発行の具体化に伴い、会員諸賢の絶大なる御協力と御激励を賜り、編集部の一員として衷心より感謝致します。

お寄せ下さった原稿の整理、編集、浄書などは編集者自身で総てを引き受けて呉れ、予定通り発刊出来る事を皆様に報告しておきます。第2号は来年1月1日に万難を排して発行しますが、予定記事は巻末記載のほか女性ランナーの長老波多野斐子さんの原稿も依頼する予定です。またハープさん、松井君、堀君などの消息もお知らせできるでしょう。会員名簿の改訂版を出す積もりですから御協力を願います。

最後に本年1月以降の献金状況を書き加えておきます。

9月9日現在 15,820円也。このうち1万円は新田製袋さんがテレビに出た時の謝礼をそっくり寄与されたものですから念のため。

田中 千春

何もないところから池畑氏の努力で形のあるものになりました。池畑氏はこの会報を73才以降の生き甲斐として、また千代田走友会のみなさん方の心の広場として楽しいものに育て上げる決意のようです。

これは僕の考えですが、会員の中で現在仕事をもっていない人、割に余暇のある人がいるなら、是非とも編集に参加して頂きたいと思います。ただ走るだけでなく、第三者として千代田走友会に参加するのではなく、自分も当事者として自分の力を発揮する場があれば、より以上に生きる喜びを見出せるものと思います。新しい事を始めるのは大変なことです、楽しみも多いのです。

念願の会報の手だてはすべて終わりました。誕生日を待つばかりです。皆さんの有形無形援助、協力によって生まれる赤ん坊「ちよだ」はまだ幼稚でしょうが、無から有を作り出すことは実に大変な事でした。皆さんの力で「ちよだ」を立派に成人させて下さい。

中原 記